

松葉牡丹

雨情

あるお庭の築山の陰に毎年夏が来る度ごとに、

紅い花と黄色い花

とが咲く松葉牡丹

の二株が植ゑられ

てわりました。

所が丁度今年の

如な雨年で土用前

からシク／＼降り

續きの雨が遂々土

用中降り通しで、

一日のお天気さへ見ずに暮らして仕舞つたので

す。

將か残暑になれば照るだらうと心待ちに思つて



居りましたのも空頼みで、残暑となりましても相
變らず雨雲は定まりません。

で、松葉牡丹は非常に氣を揉んだのです。

『何うだい紅さん、こんなに雨ばかり降つて

居ちや……折角美麗な花を咲かうと思つて居たん

だが駄目になつちやうぜ。

『お互に閉口だ、今年こそ僕なんかは今迄にな

い立派な花を咲いて、撫子や朝顔の奴なんかを驚

かして遣らうと思つて居たんだが……わゝ残念で

堪らない。』と悄然て居ります。

『君も矢つ張り僕と同じ考へで居たのか頼もし

いな！しかし君茲だぜ考へ所は。この儘にして居

りやア、屹度庭掃きの爺が僕等の花の咲かないのを

見付けて、枯れたんぢやないか何んてミジメな目に

合はせられるよ。

「それだ君、第一心配になるのは、しかし好工夫もないが、僕はかう思ふんだ、何んでも此庭の中に花の咲いてる奴を片ツ端から枯して仕舞ふさうすれば、皆な僕等と同じ有様になツちまう。

「成るほど、それは好工夫だが何麼して花の咲いてる奴を枯らすんだい。

「なーに譯がない、根切り虫を頼むさ、根切り虫を！」

「根切り虫?。」と黄色いのは、うなづきました
が、良不安心らしい顔付きを致しまして。

「滅多に根切り虫なんかを頼もうもんなら、それこそ僕等の根を喰はれツちまうぜ。

「なーに大丈夫心配にやアならんよ、此間も根切り虫が僕ん所へ遊びに來て斯う言つてた。撫子や顔朝の奴等は無闇に丈ばかり高く成つて威張り

やがるから時々根を噛つて遣らなくていい成らない
ッて。

「根切り虫が本統にそんな心掛けで居るなら好
いが、若し間違つたら大變な事になるぜ。

「決して心配にはならんさ、根切り虫は中々義
侠心のある虫だからなア。」と話して居ります内に、
ピヨコ〜根切り虫がやつて參りました。

「やア根切りさんか上へ登り給へ。」と申します
と、遠慮なしにズン〜葉の上に登つて來ました。

「今日は是非とも根切りさんに折り入つたお願
があるんだが聞いて呉れまいか。

と、紅いのがまづ申しますると、根切り虫は何
時にもなく横柄な風を致しまして。

「何んな用かは知らないが、今日は君達に掛け
合ひに來たのだ。

「それは又、何んな譯で。」と黄色いのも紅いのも掛け合と言ふので屹驚致しました。

「何んな譯、こんな譯と聞かんでも君達は自身のことだから好く知つてるだらう。何に知らん、花の咲いてるのを皆な枯して呉れると、これは飛んでも無い事を言ふ、一体お前達は此お庭に何んの爲に培はれて居るのだと思ふ?。」

と、聞いて黄色いのも紅いのもこれはと眞蒼になつて慄えだしました。

「花を咲けばこそ大事にして培て置くのだ、それに花の一つも咲かずに便々して居なから。却つて他の美くしい花を嫉んで枯らして呉れるなぞとは不心得極る。何うせお前達の根を嚙らうと思つて掛け合に來たのだから、ヨシ／＼そんな不心得なら枯れて仕舞ふまでお前達の根へ嚙り付いてや

るからさう思へ。

と、言へ捨てと止めるのも聞かずに根切り虫は歸つて仕舞いました。

さあ後で松葉牡丹は、何うかして助かり度と、いろ／＼工夫しましたが。

とう／＼根切り虫の爲に枯らされて仕舞いましたとさ。

(完)

次郎の海遊び

愛 鷗 生

次郎といふ小學校の生徒がありました、暑中休暇までは附添人に連れられて通いましたが、先生が自分の事は出來るだけ獨りでしななければ、終にはなんにも出來ない人になつてしまい、又住家の近いのに附添人に連れられて來る生徒は、弱い人